

## 霞が浦東岸地域における天気俚言\*

井 坂 末 松\*\*

## 1. ま え が き

従来、天気に関する俚言については多くの地方において研究され、それぞれの合理性も気象学的に解析されている。しかし、その数はあまり多くないように考えられる。今日、多くの人々は気象庁ならびに気象台の発表する天気予報に耳を傾けるようになり、一方、多年の人間生活の経験から生まれ、かつ使用されてきた俚言は次第にかえりみられなくなってきた。また、俚言が使用される地域あるいは時期はさまざまで、それらを研究するには多くの時間と労力を要するものであるゆえ、その研究に携わる人も少ないように見受けられる。

しかしながら、ある地域の特性に応じた俚言には気象学的方法による天気予報からは得られない貴重なものも数多くあるはずである。たとえば、最近の研究としては、菊池、尾崎、山口、宮園等(1964)<sup>2)</sup>は北九州地方の海辺にある各地からアンケートによる海難防止に関する天気俚言の収集を行い、それらの各々についてその地域の地形等を考慮の上において解析されている。このような理由から研究の必要性を認め、従来一度も明らかにされていない本地域の天気俚言の使用の実態をさぐり、なほ、それらの中の特殊なものを深く解析してみようとした。まだ資料は不十分ではあるが、現在までにまとめたもの、主として使用の実態を全般的、地域的さらには統計的に解してみた。

## 2. 資料収集地域とその地理的環境

本地域は第1図に示されているごとく茨城県の南東部に位置する行方郡の大部分、鹿島郡、稲敷郡の一部および千葉県佐原市の一部であり、霞が浦、北浦を周辺にもち、東部は鹿島灘に面した一帯である。資料収集の町村の面積は、255.6 km<sup>2</sup>、人口約 107,000 で人口密度は小さく、田、畑、山林で総面積の90パーセントを占め、農、林、漁の世帯数が総世帯数の約 67.3 パーセント

(うち農業世帯 65.7 パーセント)を占める純農村地帯である。

## 3. 資料の収集および分類の方法

まず、基礎資料となった天気俚言は比較的収集しやすい茨城県立麻生高等学校の新入生を対象とし、3か年は連続して507名の生徒に自分の家で使用している、または知っている天気に関する俚言を記入提出してもらい、その収集した数は1699に達し、それらの中で同一の俚言と考えられるものを極力まとめ、結局最終的にまとめた俚言の数は217種におよぶ。これら217種の俚言を天気または天気に関する諸現象を判別するよりどころとなるもの(例:月にかさをかぶったら近日中に雨一月)をとり上げ、自然、生物(動物、植物)、その他の3つに分類した。

次に、これら217種の俚言を列挙し、「○……使用している」、「△……聞いたことがある」、「×……聞いたことがない」に従い記入できるように作成し、生徒の通学全域にわたり各部落ごとに数名を選び、その数306名(実際記入に参加した数313名)に配布し、できるだけ家族の年輩の者に依頼して記入提出してもらった。この記入に参加した人の平均年齢は56才、職業別パーセントは圧倒的に農業(66.1%)が多く、次に勤め人(11.2%)、商業(10.2%)、漁業(3.2%)、その他(9.3%)の順となっている。

次に、これらの人々より収集した資料を各部落ごとに、各俚言ごとにまとめ、各部落ごとに「半数以上使用している」、「半数以下使用している」、「全然使用していない」の3段階に色別けして白地図に記入し、全地域に広く使用されている言、特定の地域にのみ使用されている俚言およびその他の俚言に分類した。

## 3. 資料の統計および考察

前記の方法により分類統計した資料は、全般的、地域的および気象学的の3つの観点からそれぞれの使用状況について考察を加えた。

## (1) 一般的にみた俚言の使用状況

まず、本地域における全般的な俚言の使用状況をみる

\* On the Weather Proverbs in the East Shore Area of Lake Kasumigaura

\*\* Suematsu Isaka, 茨城県立水戸農業高等学校  
—1964年11月1日受理—

第1表 収集した天気俚言の分類表

(1) 自然現象

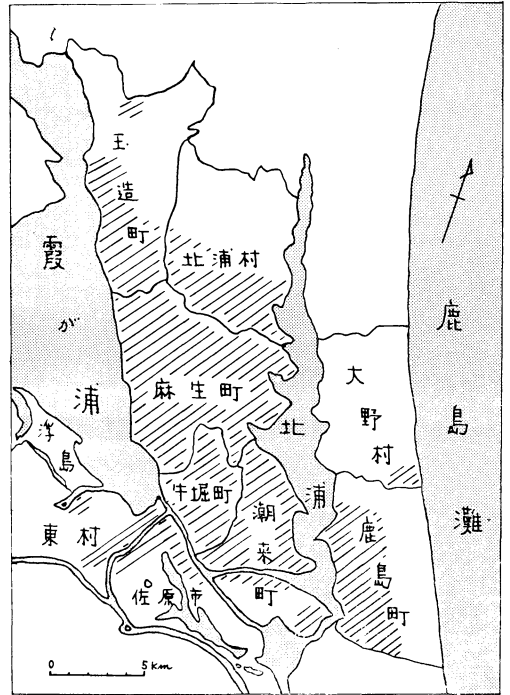
天気を判別する事柄		俚言数	魚	俚言数
風	模様	24	よしきり	2
空	模様	20	へ	2
	雲	10	馬	2
	音	10	鳥	2
	雷	8	猫	1
し	ぐれ	7	は	1
	星	7	もぐ	1
	虹	6	と	1
	月	5	犬	1
	霧	5	も	1
も	や	5	毛	1
遠	影	5	み	1
太	陽	5	か	1
	霜	3	せ	1
気	温	3	か	1
地	震	2	と	1
	雪	2	し	1
	煙	2	ら	1
	露	1	は	1
		1	の	1
(計)		130	(計)	63

(2) 生物(動物)

天気を判別する事柄		俚言数	生物(植物)	俚言数
す	ずめ	5	かぼ	1
か	らす	4	ち	1
く	すも	4	竹	1
	虫	4	種	1
み	みず	4	(計)	3
は	すと	3	(3) その他	
	鶏	3	天気を判別する事柄	俚言数
	人	3	(計)	21
あ	り	3	合計	217
か	え	2		
つ	ばめ	2		

第2表 本地域以外ではあまり聞かれないと考えられる俚言

番号	天 気 俚 言
1	筑波山に雲がかかった時は雨、よく見えるときは晴
2	浜の鳴りが西方にまわると晴、東方にまわると雨
3	北山しぐれは音ばかり
4	湖面に砂が浮んだときは近い日に雨
5	湖面に山影がさしたときは近日中に雨
6	霞ヶ浦の彼岸の山がはっきり見えると晴、はっきり見えないと雨
7	浮島(対岸の地名)が近くに見えるときは、その日は雨
8	秋、霞ヶ浦でコッポリ(水底より発生するガスの音)がなると天気が悪くなる
9	雷は北方からはなかなか来ないが南西方からはきわめて早く来る



第1図 資料収集地域(斜線の部分)

意味において、収集した全俚言の分類表を第1表に、本地域以外ではあまり聞かれないと考えられる俚言を第2表に、また、各俚言の「使用」、「不使用」の者の数を調べ、パーセントを算出して、使用パーセントが60以上の俚言23種および10以下の俚言19種を抽出し第3表および第4表を作成した。これらの表より次のことがわかる。

- 1) 自然現象、生物およびその他の3つの分類の中で、自然現象により天気を判別する俚言の数が圧倒的に多く、総数のおよそ60パーセントをしめている。なかでも風、空模様により判別する俚言の数が特に多い。
- 2) 植物により天気を判別する俚言の数がきわめて少ない。
- 3) 本地域の特性を表わしている水辺、海辺におけ

第3表 本地域でよく使用されている俚言

番号	天 気 俚 言	使用パーセント
1	夕焼けは明日の晴	90
2	朝もやは晴	85
3	月にかさをかぶった時は雨になる	83
4	雪の明日は晴	80
5	雨が降っているうちに、にじがでるとまもなく晴れる	74
6	西風が吹く日は晴	72
7	星が多くでると明日は晴	72
8	西の空が晴そると天気よくなり、曇ると悪くなる	72
9	雷が鳴ると梅雨があける	70
10	朝霧が深い時は晴	69
11	西風は夕方にやむ(西風日いっぱい)	68
12	汽笛が聞こえると近いうちに雨	67
13	筑波山に雲をかぶった時は雨、よく見えるときは晴	66
14	朝焼けはその日の雨	66
15	雪の多い年は豊作	66
16	星空で冷える夜は明日の晴	66
17	雲が早く飛ぶとその日は風	65
18	虹がでると天気よし	64
19	夜寒ければ明日は晴	63
20	秋、冬は西の方が明るければ晴	63
21	けらが家の中へ飛んでくると天気が悪くなる	62
22	雨がえるが鳴けば明日は雨	61
23	猫が手を耳の方までかけて顔を洗うと雨	61

る諸現象(海鳴り、山影、水辺に住む動物など)に関する俚言が比較的多く使用されている。4) 本地域以外ではあまり聞かれないと考えられる俚言(第2表)は1と6および3と9など本質的には同意の俚言と考えられるものも含まれており、その数は少ない。5) 本地域においてよく使用されている俚言(第3表)は、普遍性をもつ俚言、すなわちどこでも聞かれ、また使用されている俚言が圧倒的に多く、あまり使用されていない俚言(第4表)は、他地域においても使用されていない俚言が多く含まれており、しかも気象学的根拠に乏しい俚言が比較

第4表 本地域であまり使用されていない俚言

番号	天 気 を 言	使用パーセント
1	西風が吹くと雨が降る	4
2	犬(猫)が草を咬むと大風	4
3	朝もやはその日の雨	5
4	流れ星が南の方へ向いてゆけば雨、西の方へ向いてゆけば晴	6
5	かぼちゃのつるの多い年は大風	6
6	馬のしきわらがかわくと雨	7
7	カがもちつけば雨が降る	7
8	朝飯を食べているとき、茶わんに飯がつくときはその日は雨	7
9	からすが巢に帰らないと雨	8
10	みみずが朝でると雨	8
11	夜、鳥がなくなるとどんな風もやんでしまう	8
12	晴天雲なし、三日中に雨あり	9
13	朝霜が降るとその日は強風	9
14	夕ばとなげばかまをとげ、朝ばとなげばその日の洪水	9
15	星がない時は晴れる	9
16	飛行機の響きがよく聞こえると明日は雨	10
17	湖面に砂が浮かんだ時は近い日に雨	10
18	みみずがはいだすと晴れる	10
19	日没に猿子(雲の名)があれば大風	10

的多い。

以上の事実により、本地域における天気俚言の全般的な使用の状況が把握できる。上記の1)、2)については、天気俚言の使用の全般についていえることであり、とくに限本地域にのみったことではないと考えられる。また4)については、この研究において大いに期待したものであり、その数は少ないが著者の経験からみてもかなり適中率が大きく、今後さらにその気象学的根拠について究明してゆきたい。

#### (2) 地域的にみた俚言の使用状況

ここで、調査地域内の全域にわたって広く使用されている俚言と調査地域内の特定の地域にのみ使用されている俚言とを前記の方法により分類し、それぞれ第5表および第6表にまとめた。これら2つの表より、全域にわたって広く使用されている俚言は使用パーセントの大き

第5表 全地域にわたって広く使用されている俚言

番号	天 気 俚 言
1	夕焼けは明日の晴
2	西の空が晴れると天気がよくなり、曇ると悪くなる
3	秋、冬は西の方が明るければ晴
4	月にかさをかぶった時は雨になる
5	汽笛が聞こえると近いうちに雨
6	朝もやは晴
7	朝霧が深い時は晴
8	筑波山に雲がかぶった時は雨、よく見える時は晴
9	雨が降っているうちに虹がでるとまもなく晴れる
10	雷が鳴ると梅雨があける
11	雷は北方からはなかなか来ないが、南西方からはきわめて早くくる
12	朝焼けはその日の雨
13	西風は夕方にやむ(西風日いっぱい)
14	西風の吹く日は晴
15	星が多くでると明日は晴
16	雲が早く飛ぶとその日は風
17	地震があった後は天気が変わる(六つ、八つ風に、九は病、五七の雨に四つひでり)
18	雪の明日は晴
19	雪が多い年は豊作
20	星空で冷える夜は明日の晴
21	夜になっても温度が変わらないときは雨
22	雨がえるが鳴けば明日は雨

い俚言(第3表)と共通する俚言が多いことがわかる。また、特定の地域にのみ使用されている俚言については、使用地域による地域区分をするほどには明確に地域が細分されておらず、霞が浦と北浦の沿岸地域に多く使用されている俚言と、3、7のように使用パーセントがわずかに4パーセントというような一部の地域にのみ限られて使用されている俚言とを抽出した。

第6表の1、10は霞が浦、北浦の沿岸全般に使用されており、2、4、8、9は霞が浦沿岸にのみ使用されており、さらに、5、6は両沿岸というよりはむしろ調査地域の南部にあたるいわゆる水郷地帯に多く使用されてい

第6表 特定地域にのみ使用されている俚言

番号	天 気 俚 言
1	湖面に山影がさした時は近日中に雨
2	霞ヶ浦の彼岸の山がはっきり見えると晴、はっきり見えないと雨
3	西風が吹くと雨が降る
4	南西の強風は三日ともたぬ
5	よしきりが鳴くとしける
6	よしきりが鳴くと雨
7	犬(猫)が草をかむと大風
8	湖面に砂が浮かんだ時は近い日に雨
9	秋、霞ヶ浦でゴッポリ(水底より発生するガスの音)がなると天気が悪くなる
10	日没に猿子(雲の名)があれば大風

る。これらは、いずれも地域のおかれている地理的条件を明らかに反映して生じた俚言の使用分布と考えられる。また、3、7は使用している部落がわずかに数部落であるが、その使用している部落がいずれも隣接していることがわかった。したがって、それらの俚言と使用している部落との結びつきについては民俗学的な研究が必要であろう。

### (3) 気象学的根拠からみた俚言の使用状況

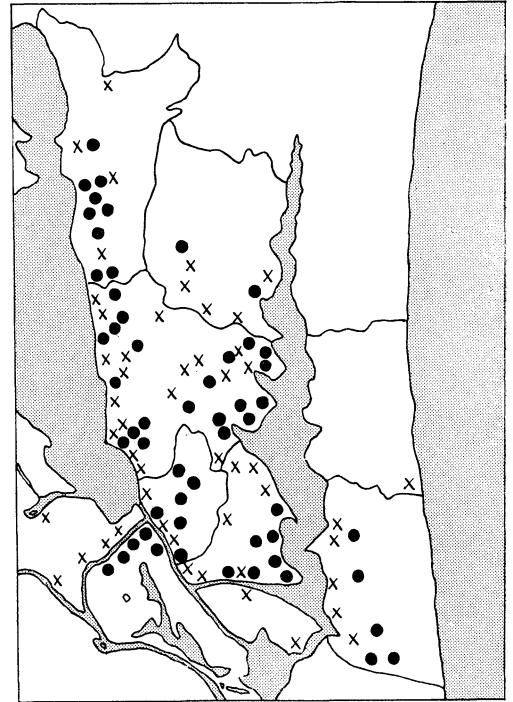
まず、217種の全俚言の中から気象学的に根拠があると考えられる俚言および根拠がないと考えられる俚言をそれぞれ15種ずつ抽出し、第7表および第8表にまとめた。さらにこれらの各俚言を各部落ごとに「使用」、「不使用」のパーセントを算出し、気象学的に根拠があると考えられる俚言の使用度が50パーセント以上であり、しかも根拠がないと考えられる俚言の使用度が50パーセント以下である部落(●印)、および、気象学的に根拠があると考えられる俚言の使用度が50パーセント以上であり、しかも根拠がないと考えられる俚言の使用度が50パーセント以上である部落あるいは全くその逆のパーセントを示す部落(いずれも×印)の分布、第2図に示した。なお、気象学的に根拠があると考えられる俚言の使用度が50パーセント以下であり、しかも根拠がないと考えられる俚言の使用度が50パーセント以上である部落は皆無であった。第2図によると、気象学的根拠という点からみた俚言の使用状況は、特にどの地域がすぐれているということも見いだせず、山間部と水辺部という2地域にわけて考えることもできない。また、

第7表 気象学的に根拠があると考えられる俚言

番号	天 気 俚 言
1	夕焼けは明日の晴
2	夏海, 秋山 (夏は東の方, 秋は西の方の空が晴れているとき天気がよいの意味)
3	夕焼けの黄色なのは晴天の兆
4	秋, 冬は西の方が明かるければ晴
5	日にかさをかぶった時は雨になる
6	月の上りに日の下り, それにかさをかぶるとき天気が悪くなる
7	汽笛が聞こえると近いうちに雨
8	寺の鐘が遠くから聞こえたときは明日は雨
9	サイレンが良く聞こえると雨
10	太陽のまわりにかさができたら明日は雨
11	朝にじに船出すな
12	雷は北方からはなかなか来ないが, 南西方からは極めて早くくる
13	朝焼けはその日の雨
14	冬の南風一里ともたぬ
15	稲葉に夕露多きときは晴

第8表 気象学的に根拠がないと考えられる俚言

番号	天 気 俚 言
1	寒雪はその年の凶作
2	西風が吹くと雨が降る
3	彼岸後の西風は大洪水
4	八十八夜の西風は七十五日後に大水がでる
5	月の近くに星がでると二日ぐらいうちに雨
6	流れ星が西に落ちると明日は西風が吹き, 南へ落ちると南風が吹く
7	流れ星が南の方へ向いていけば雨, 西の方へ向いていけば晴
8	犬 (猫) が草をかむと大風
9	馬の敷きわらがかわくと雨
10	のみを火に入れて音がすると晴
11	オンシャカ様 (旧四月八日) に雨が降るとその年はひでりになる
12	土用三日に天気が悪いと土用中天気が悪い
13	茶柱が立つと雨になる
14	彼岸太郎, 八専次郎, 土用三郎, 寒四郎
15	げたを投げて表がでると晴



第2図 気象学的根拠からみた俚言の使用分布

(●: 比較的すぐれていると考えられる部落)  
(×: 比較的劣っていると考えられる部落)

第9表 気象学的根拠からみた俚言の職業別使用度

	気象学的に根拠があると考えられる俚言の使用パーセント		気象学的に根拠がないと考えられる俚言の使用パーセント	
	勤め人	農業従事者	勤め人	農業従事者
勤め人	40	15		
農業従事者	41	19		

市街地を形成している部落と純農村にある部落とも特に優劣の差は認められない。

次に職業別について考え、勤め人および農業従事者を資料提出者の中から全地域にわたるようにそれぞれ20人ずつ抽出し、これらの人々について前記の気象学的に根拠があると考えられる俚言および根拠がないと考えられる俚言それぞれ15種の使用状況を整理し、第9表のような結果を得た。これによると、両者の差は僅少であり、気象学的根拠からみた俚言の使用状況については、職業別による差異は明確でない。

以上の事実により、本地域における気象学的根拠からみた俚言の使用状況は地域別、職業別のいずれにも明確

な差異は認められなかった。しかし、第3表および第4表より考察されるように、本地域において使用パーセントの大きい俚言は気象学的に根拠があると考えられるものが多く、また使用パーセントの小さい俚言は気象学的に根拠の乏しいと考えられるものが多いことがわかった。

### 5. あとがき

この研究をとおして、初期の目標であった本地域における天気俚言の使用の実態がわかった。また、本地域独自の俚言および特定地域にのみ使用されている俚言については、その数を多く得られなかったが、若干認めることができた。今後は未解析の個々の俚言の気象学的根拠、特に他地域であまり聞かれないと考えられる俚言について、機会をみて解析してゆきたい。

終りに、この研究をすすめるにあたって、懇切なご指導をいただき、また本稿の閲読をいただいた東京教育大学吉野正敏博士、茨城県立下館第一高等学校津田正志校長ならびに茨城県理科教育センター玉村幹雄副所長のご厚意に対し深く感謝の意を表します。

なお、本稿の資料の収集に終始ご協力くださった茨城県立麻生高等学校科学クラブ関係の諸氏に厚くお礼を申し上げます。

### 参 考 文 献

- 1) 大後美保, 1965: 「ことわざの真実」三省堂。
- 2) 菊池繁雄, 尾崎康一, 山口亨, 宮園実康, 1964: 北九州における海難防止に関する天気俚言, 天気, **11**, 131~137 ならびに **11**, 166~172。

## 理 事 会 便 り

### 第8回(13期) 常任理事会議事録

日 時 昭和40年1月12日(火) 17.00~20.00

場 所 気象庁観測部会議室

出席者 正野, 北岡, 桜庭, 大田, 今井, 須田, 岸保, 増田, 吉野, 小平, 神山, 安藤(旧荒井)各理事(順序不同)  
庶務関係(北岡, 増田, 安藤理事)

### 議 決

1. 40年5月の総会において集誌だけのA会員をB会員にふり返えることに定款を改正する予定であるが、この場合B会員にふり代った人は天気のパックナンバーが不揃いになるので、1月号から天気をあわせとるように勧誘することを承認する。

2. 気象集誌に外国人からの寄稿が多いが、原則として会員以外の方には会員になることを勧誘する。
3. 昭和39年度土木学会賞の論文推選の依頼については当学会としては、土木方面の適当な論文がないので辞退する。
4. 国際雲物理会議のレセプションは、学術会議の諒解がえられれば、当学会としては学術会議と共催することに異議はない。
5. 会計事務の体制を確立するため、適当な候補者があれば、当学会の会計事務を依頼することを承認する。

## 春季講演会プログラム

会期 3月26日(金) 9時30分より

会場 東京都千代田区大手町 気象庁5階第1会議室

1. 福岡義隆(教育大理): 都市郊外における地中温度分布 (15分)
2. 保柳睦美(都立大理): 歴史時代における西域の河川の水量の変動と土地の荒廃 (15分)
3. 磯野良徳・大河内芳雄(気象庁電計): 北半球4層傾圧モデルによる予報時間の延長 (20分)
4. 小林 望(教育大理): 日本付近の上層風の季節変化 (15分)
5. 陳 国彦(教育大理): 台湾の降水分布に関する総観気候学的研究—1961年の例について— (20分)
6. 田宮兵衛(教育大理): 秋りんの気候学 (15分)

7. 関口 武とその協力者(教育大理): 東京の大雨の気候学 (15分)
8. 吉村 稔(教育大理): 航空写真による越後駒ヶ岳周辺の雪の調査について (15分)
9. 樫根 勇(教育大理): 中気候の立場からみた関東地方における下層大気熱収支について (30分)
10. 正野重方・田中 浩(東大理): 風向風速の変動法則と乱流拡散への応用 (30分)
11. 水越允治(三重大学芸): 四日市市とその周辺における地表付近の風向について (15分)
12. 井上修一・関口 武(教育大理): 関東地方の海陸風の気候学 (15分)
13. 有住直介・鈴木 茂(気象庁高層): 気象ロケットMT-135による高層気象観測方法およびその観測結果について (30分)